

学ぶことのユニバーサルデザイン

目時 修 (Osamu METOKI)

城西国際大学経営情報学部

1 今なぜ、知識を問わなければならないのか

本発表では、無藤(2016:31)が主張する「授業はプロセスなので、授業も子どもの学習もリニアなのである。順番にやるしかない。これが人間の特徴だ。」という枠組みを、教師が生徒の発達に着目した経験的な学びへと拡張させることについて述べる。本発表で筆者が主張する拡張の枠組は、教師が意識的に生徒をアセスメントすることを気づかせるものである。例えば、生徒を画一的・強制的にスタートラインに並ばせていないこと、生徒のワクワクすること、これならできそうだから、または自分の将来に関係しそうだからやってみようなどの生徒の文脈に沿って学習が始まること、生徒同士の対話を繰り返すことを助長するなどの特徴をもっている。このような、生徒が授業をはじめとする教育活動に対して十全にアクセスできる環境こそが、ユニバーサルデザイン、すなわち、障害の有無にかかわらず、「使う人の側に立ってデザインする発想」(阿部,2017:9)としての「学ぶ側の立場」にたった視座である。つまり、このように学校と社会のつながりを捉え直して、学校全体で授業を創っていくという、「学ぶことのユニバーサルデザイン」をもとに据え、学校が地域や社会、世界との接点を持ちつつ、多様な人々とつながりながら学ぶという学校づくりについて見ていく。

2 学校と社会をつなげることは

生徒の日常の“あれっ?”は、教科書の中にはない現実に存在する“真正(Authentic)”な疑問である。この“真正”な疑問に対する解決の過程は、学校での学習の断片的な知識と実際に生活や社会で直面する状況に即した学び(石井,2015)の結合といえよう。その結合が、たとえ間違った発言や失敗したことであってもよく、ここから考えることの意味を見出し、自分の意見が他者や社会で受け入れられ、「社会的、文化的なミーティングポイント」(アールベリエル,2019:87)として、学校が社会を構成する異なる個人が集まる空間として機能すればよい。このような空間で教師と生徒が力を合わせて探求する過程では、自分だけで、または他者と「力」を合わせて探求するわけだが、その過程で意見衝突(立場の違い・方向性の違い・主張の違いなど)などが起こる。この過程こそが、教師と生徒が「協同的な学び」を実現する過程であり、教師も生徒も何でもいい合える「居心地のよいクラス」づくりそのものなのである。この「居心地のよいクラス」が基盤にあれば、学校で学んだ知識・技能や学校内外で経験したことや疑問に思ったことを教師と生徒が一緒になって、つなぎ合わせ、当該の問題を解決し、その解決により、新しいものに気づき、さらに関連した新たな問題に挑戦していくという主体的な思考力・判断力・表現力の表出が容易になろう。

3 知のユニバーサルデザインを教育の視座から考える

戦後の日本の学習指導要領は国内の各学校の教育の質を確保するため、学校教育法や文部科学省の規則など、学校の教育課程に関しての基準の一つとして存在している。授業で使用される教科書を1年間で、どのように“こなす”のかという年間指導計画が作成され授業展開がされる。教科書を“こなす”意識は、授業の1単位時間をどうやって“成立させるか”に変化し、教師が考える正解を生徒に押しつける“教え込む”傾向が強くなる。この“こなす”から“教え込む”への意識の変化は、“これだけは何としても教える”という意識になり、教科の目的や単元間の関連性を取り扱う時間を確保することを気

にかけなくなる。この教師の意識は、大学受験のクリアに向けて、個性を伸ばすことより、目先のテストに向けて教師用の指導書に書かれている教え方に駆り立て、「他の人が考えつかないような創造性よりも、他の人が考えた知識の丸暗記が強調され、（中略）いかに速く正解にたどり着くかの競争」（川崎,2019:12）を招いている。

このような様相の中で中央教育審議会は、「何を知っているか」ではなく、「何のために学ぶのか」ということこそが重要だという考えに立って、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、そして学びに向かう力や人間性などの生きる力を総合的に育てていく必要があるとした。高等学校学習指導要領には、各学校において指導すべき中核的な事項、各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示すことで、教科指導における教師の自発的な創意工夫を求めた。同時に生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が伴った、教師の特色ある教育活動を求めている。

筆者は聾学校で担当した授業や特別活動などにおいて、生徒が家庭内や登下校時に感じた“あれっ？”と感じた疑問を拾い上げ、それを一緒に探求（確認）する教育実践をした。この時の生徒たちのイキイキとした表情は忘れられない。この授業過程は、生徒の“つぶやき”をもとに教師とその生徒、複数の生徒が共に考えをつなげ、自分の意見が他の生徒に認められた経験の実感、そして「承認」される過程である。つまり、生徒の“思いつき”や“つぶやき”を聴きながら、教師は生徒と一緒に探求することを通じて、生徒の思考や知識、生活の状態を“値踏み”ではない、実態把握が可能になるのであろう。

生徒の状態（発達）に応じて、戻ったり、ショートカットして先に進んだり、他の教科の関係性から理解を促したり、日常生活や地域の課題の解決策から教科との関連を考えたり、立ち止まって考えたり、繰り返して定着を促すなどの自由度が大きい授業が可能になる。つまり、学校全体で社会とつながる授業を創っていくことこそが、「学ぶことのユニバーサルデザイン」を考えることであり、それにより、生徒が多様な人々がつながりながら学ぶ学校づくりを可能にらしめることになるのであろう。

参考引用文献

- アールベリエル松井久子(2019)「スウェーデンの学校とインクルーシブ教育」川崎一彦・野澤由紀子・鈴木賢志・西浦和樹・アールベリエル松井久子著『みんなの教育 スウェーデンの「人を育てる」国家戦略』ミツイパブリッシング,pp.85-147
- 阿部利彦(2017)「クラスの「気になる子」だけを気にしていませんか？」阿部利彦編著『通常学級のユニバーサルデザイン プラン Zero』東洋館出版社,pp.8-38
- 石井英真(2015)「パフォーマンス評価とルーブリックの基礎と最前線」第21回大学教育研究フォーラム
- 川崎一彦(2019)「スウェーデンの起業家精神教育」川崎一彦・野澤由紀子・鈴木賢志・西浦和樹・アールベリエル松井久子著『みんなの教育 スウェーデンの「人を育てる」国家戦略』ミツイパブリッシング,pp.11-50
- 無藤隆(2016)「「社会に開かれた教育課程」と求める人間像とは」『「社会に開かれた教育課程」を考える 新教育課程ライブラリⅡ Vol.11』ぎょうせい,pp.30-33
- 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領」
- 中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」